

推定される。

五、結びに

仏足跡とスツッパの関係に就いては、法頭、宋雲、惠生、玄奘等のインド旅行記によると、スツッパの前に仏足跡を見る、又は寺塔を以って覆す等の記載が見られる。

仏足跡と蓮華に関しては、義浄撰になる「大唐西域求法高僧伝」に那爛陀寺の戒壇に「仏足蓮華跡」を見た事が記してある。何れもその形状に具体性を欠くが、仏足跡とスツッパ、蓮華の関わりは歴史的なものと解される。日本では約三百程の仏足跡表現が見られ且つ新建立をみているが、その殆んどが単独石での表現となっている。留意されるところである。

ラリタヴィスタラの部派

岡野 潔

第五部会

ラリタヴィスタラ(LV)とは阿含より抜かれて付加された部分が存する。現存のLVは普羅經の原本に多くの付加がなされて出来たものであるが、この普羅經の成立後に付加された部分に、阿含からそっくり借用されてきた、原材料まるだしの箇所が存するのである。そこでこの稿では、LVの付加部分における阿含の借用箇所を指摘し、あわせてこれらの資料の部派所属を考察してみた。

第五部会

語のままにもかかわらず、両者の類似性は著しい。両者がいかに近いかは、カッコにあげたパーリ本と比べると、一層明らかになる。LVとMVはそれぞれ近縁の部派の本来同一の阿含を借用したのではない。

ではLVの付加部分に借用された他の阿含断片を検討してみよう。実はサッチャカ大經と同じことが別の三つの断片においても見られるのである。

(D)精勤經(魔の誘惑) 261・2—263・5

(E)梵天の勧誘 395・16—398・17, 399・21—401・20

(F)アーシームマカ教徒との出会 405・3—406・15

これら三つの阿含断片にもパーリ資料のほかに、MVにおいて対応箇所が見出せる。つまりMVも同じように阿含資料を借りているわけである。

(G) = MV, I, 238・3—240・17 (=Suttanipāta 425—449段)

(H) = MV, II, 314・13—319・18 (=Mahāvagga I・5・1—13

節)

(I) = MV, III, 325・12—327・7 (Mahāvagga I・6・7—9節) これらにおいても先の場合と等しく、LVとMVに用いられたそれらの阿含断片はきわめて類似し、パーリ本からは隔たっている。他に付加部分における阿含の借用としては、(J)殺淫樂への魔の勧め 377・9—21 (Mahāparinibbāsa, 3・34に对应)があるが、MVに对应する借用はない。また付加部分の魔の娘たちの誘惑 378・4—379・14と(K)フリーダーの死を知り、五比丘をえらふ 403・18—404・13はMVとの対応が見出せるが、

まず、サッチャカ大經 (MN, No. 36) をそのまま用いている部分がLVの付加部分に六箇所存在する。(A)フリーラーに ついては 238・14—239・16 (B)前代未聞の三譬論 246・8—248・5 (C)修行地を見出す 248・6—12 (D)正息禅の修行 251・6—252・7 (E)断食の修行 254・1—256・10 (F)修行の放棄 263・6—20

これらは逐字的な借用であって、今あげた六つの断片によりサッチャカ大經の全体の半分近くの原文を回収することができる。サッチャカ大經には漢訳はなく、パーリ本が存在するだけであるが、LVと同じ部分をマナーヴァスツ (MV) から回収することができる。MVのいわゆる『第一出家經』(MV, I, 115—133) は意図的に阿含資料のみを素材としてつくりだされており、そこからサッチャカ大經の原文が回収できるのである。こうして得られたMVの断片群はLVの断片群と全部対応をせうる。

(G) = MV, I, 118・1—119・6 (=PTS, MN, I, 240・26=160・33—165・14)

(H) = MV, I, 121・1—123・15 (MN, I, 240・29—242・22)

(I) = MV, I, 123・16—124・1 (MN, I, 240・26=166・36—167・8)

(J) = MV, I, 124・1—125・7 (=MN, I, 242・23—244・37)

(K) = MV, I, 125・7—130・6 (=MN, I, 245・6—246・19)

(L) = MV, III, 130・7—18 (=MN, I, 246・20—247・5) LV本サッチャカ大經はサンスタリット化され、MV本は谷

ト

しかし素材は手が加えられ、単純な比較を許さない点があるため、ここでは指摘にとどめる。(以上(A)から(L)の九つのLVとMVが原材料をさらけ出している部分を検討することによって、そこで用いられているソースは系統的に大変近く、本来同一のもので、両ソースの距離は大きなグループの中の異なる分派と見なしうる程度のものである、と十分結論ができる。そこでLVとMVは部派の上で同系統ではないか、と推測される。MVは大衆部の説出世部の伝である。『異部宗輪論』によれば、大衆部には説出世部を含む本来九つの異派が存在した。LVが付加増広をなすにあたって用いた阿含はやはり大衆部の中の一派のものではなかっただろうか。

末

『法蘊論』『雜事品』の性格

西村 実則

『法蘊論』『雜事品』は染汚法を論じたものであり、貪瞋癡を冒頭に置き、最後の擾悩に至る七十八法を順次解説している。たしかにそこには『俱舍論』以後の煩悩論において重視される六種の煩悩つまり貪瞋癡慢見疑を見出すことができるから、「煩悩」と「随煩悩」とを未分化のまま集録したものとみることができよう。しかし染汚法全体を「煩悩」と「随煩悩」とに峻別するのは、主に『俱舍論』以後なのであって、そうした貪などの六つを含んだままで「随煩悩」であるとみる別の捉